長岡工業高等専門学校研究紀要　第44巻　第1号（2008）

報　告

「長岡高専地球ラボによる学内の国際化」立案から実施まで

高橋綾子[1]

[1] 一般教育科(Liberal Arts-English, Nagaoka National College of Technology)

The Internationalization by NNCT Chikyu-Lab.: the process from planning to implement

Ayako TAKAHASHI[1]

Abstract

Nagaoka National College of Technology had successfully submitted "The Internationalization by NNCT Chikyu-Lab." to Japan Students Services Organization's Students Support Project. The purpose of this project is to construct the educational circumstance to help and learn for both Japanese students and foreign students. It is remarkable that the cooperating contract between Nagaoka City and NNCT allowed us to conduct Chikyu-Lab. organization together and the achievement of Nagaoka's international exchange would promote to give various educational programs as Students Services and to improve mutual understanding and enlightenment. Through this report, I will examine the development of the uniqueness of NNCT Chikyu-Lab., comparing to other schools and how it would be expected in the future.

Key Words: *Chikyu-Lab., Students Services, Constructing the supporting system of international exchange*

1.　はじめに

平成 19 年度日本学生支援機構が募集した学生支援 GP、「新たな社会的ニーズに対応した教育プログラム」に長岡高専は「長岡高専地球ラボによる学内の国際化」の案件で応募し採択に至った。申請書とヒアリング資料を通して、プロジェクトの概要はこれまでに学内に周知されている。プログラムの概要は以下の通りである。

急速に進展する産業のグローバル化に伴い、技術者教育には国際性の育成が強く求められている。

本取組は、これを学生支援の観点から新たな社会的ニーズと捉え、内外交流の範囲が限られがちな高専生活（小さな高専）の中で、学生が国際人として

大きく成長する基盤を養うための支援環境づくり及び教育プログラムの提供を目的とする。

具体的には、これまでの本校の学生支援活動及び留学生受入実績を基に、学生の国際性涵養を支援する拠点として地球ラボを設置し、長岡市国際交流協会等の地域団体との連携を図りつつ、留学生と日本人学生との日常的な交流を最大限に引き出し、双方にとって効果的な国際理解環境を創出する。

留学生を、支援の受け手から学生全体の国際性を育成する担い手として位置付け、活躍させる点が本取組の特徴の一つである。これにより高専低学年からの国際理解教育の充実、留学生、日本人学生双方向の活動による国際性の育成が期待される。(申請書より)

本プログラムは、長岡高専が有する教育的資源である、全国高専第一位の留学生数、「雪つばきの会」等の留学生支援体制、自主・自立の精神に貫かれた学生会・寮友会活動、グローバリゼーションに対応し、留学生の母国訪問を兼ねた海外派遣研修、そして、「米百俵の精神」を人材育成の根本におき、青少年国際理解教育に実績のある長岡市との連携、以上４つを、「地球ラボ」という新たな取組の場で、有機的連携、パワーアップを図っていくといくことをならいとする。上記の既存の教育環境に内在するニーズを把握することは、本プロジェクトを立ち上げる上で重要な要素であった。学生のニーズを把握するプロセスを経て、長岡市との連携の中で、独創的かつ普遍的な国際交流モデルを創出することが、「地球ラボ」に課せられた使命であると考える。

本報告では、まず、申請書作成までに学内で実施した学生に対するヒアリングを通して学内の現状を報告し、長岡市国際交流センターの活動と、他高専の国際交流の現状を踏まえて、今後の地球ラボの課題をみつめたいと考える。

２．長岡高専の実情

２—１　日本人学生ヒアリング

プログラム作成のための、調査は次のヒアリングから始まった。日本人学生の現状とニーズを把握する目的から始めた。手順は、現状把握、国際化ニーズ把握、国際交流で自分がやりたいこと、アイデアランキング、表－1 の通りである[1)]。

表－１　日本人学生ヒアリング　(平成 19 年 6 月 12 日　440 教室にて　参加学生 22 名)

現状把握	・日本の生活を受け入れてくれない、相互理解が難しい（寮友会幹部やチューターからでた意見） ・仲良くできる ・知らないことを知ることができる ●留学生と日本人学生の交流の範囲は狭く一方通行で、一部の人にとどまっており、多くの学生は距離感を感じている
国際化ニーズ	・交流（スポーツ、中でも留学生の国のスポーツをする、料理、一緒に出かける、学校行事など普段日本人の学生同士でしていることを留学生と一緒にやってみたい） ・留学生のことを知る（言葉、宗教、お国自慢、国際問題について話し合う）
国際交流これからやりたいこと	・語学や文化の学び（お互いの国の歴史に着いて調べ共通の知識として発表する） ・コミュニティやネットワークづくり ・コラボしたイベント長岡らしさを活かすなど国際交流の場や機会を共有する ・国際機関で働く、エンジニアとして地域貢献する
アイデアランキング発表（ベスト３の投票）	留学生の国へ行く　３２点 留学生のことを知る　２２点 （話しを聞く、ディスカッション） 日本を知ってもらう　２２点 留学生と遊ぶ（外出等）２０点 留学生とスポーツをする　１４点 留学生が企画する学校行事　１２点 コミュニティづくり　７点 これらより、学生の意見をまとめた長岡高専の国際化アイディアは以下の３項目となる １、留学生を通して国際性を身につける（留学生の国へ行く、留学生のことを知る） ２、交流の機会・場所をつくる（留学生とスポーツをする、留学生が企画する学校行事） ３、ネットワーク情報発信（長岡を日本を知ってもらう）

ワークショップから得られた現状と学生支援ニーズとして、日本人学生と留学生の交流は、一部の狭い範囲に留まっており、多くの学生が交流に踏み出せないでいることが伺われる。現在の行動は交流が少なく消極的であるが、自分が考える国際化については、数は少ないながら積極的意見がみられ、実際の行動と意識の違いが読み取れる。そのためか、これからやりたいことでは、具体的かつ積極的な提案がでてきている。現在、学生は留学生との交流も国際交流もやってみたいという意欲はあるが何をしてよいかわからないという状況である。これらより、学生自身が国際性を身につけるために学内に国際交流のきっかけと環境を提供することによって、国際性の育成が期待される。

２－２　留学生ヒアリング

留学生の学校生活の現状と課題を把握し、留学生支援ニーズを掴むものである。表－２の通りである。

表－２　日本人学生ヒアリング（平成19年6月8日寮管理棟多目的室　参加留学生18名）

現状把握	・ コミュニケーションの困難さ（日本語が下 ・ 手、漢字が読めない、話しに入れない、会話がわからない、 ・ 仲間づくりの困難さ（外国人に対する態度や日本人の対応） ● これら一連の問題は留学生のコミュニケーション能力の向上や日本人学生の異文化理解という双方への支援が必要な点である。
国際化ニーズ	・ 留学生向け学習支援 ・ 日本文化体験 ・ 文化紹介（マレーシアの料理を教えたい） ・ ネットワーク作り ・ 留学生のスピーチコンテスト ・ ボランティア ● 留学生自身が今後取り組める課題は、留学生による異文化情報発信とネットワークづくりである。
国際交流やりたいこと	（表－２つづき） ・ 日本語のトレーニング ・ スポーツ交流（留学生チームをつくる） ・ ネットワークづくり（日本人と一緒に遊びたい、今活躍している先輩たちの話しを聞きたい、日本人学生とのつきあいを深めたいなど）
アイデアランキング発表（ベスト３の投票）	インターネット整備　３２点 留学生の部屋（寮の文化的配慮）２１点 友だちづくり（留学生・他校交流）２１点 日本語・留学生用補習　１５点 友だちづくり（日本人・ホームステイ）１３点 母国紹介の機会５点 ボランティア１点 これらより、留学生が学生支援として求めていることは、 １、環境整備（インターネット、寮の留学生対応） ２、交流の機会（友だちづくり、ネットワークづくり、情報発信） ３、学習支援（日本語・留学生用補習） とまとめられる。ワークショップから得られた。注目すべき留学生支援ニーズとしては、「交流の機会」の提供と「留学生による情報発信」　これまでのテーマで出された留学生の意見のほとんどが「してほしいこと」「要求」であり、自らが動くことへの意識が低いことが特徴である。留学生自身が教育支援の受け手「受動的存在」と認識しており、能動的活動への意欲は低いといえる。これは、本校の自主・自立を尊重した学生生活という理念と相反しており、今後「留学生の主体的活動」の促進として発展的に解消するべき課題と考えられる。

２－３　学生の「思いつきシート」より

「思いつきシート」（図－１参照）は、日本人学生、留学生に対して、ヒアリングの開始とともに配布されたものである。シートには、ヒアリングの趣旨が明記されている。学生は、このシートを使って、自分たちのアイディアをまとめるよう指示される。ヒアリング終了後に回収するが、学生がヒアリングで未発表の情報を得ることが可能である。以下は、このシートに書かれていた学生のアイディアをまとめたものである。

寮生活では、時間、衛生管理、捕食室の管理など

を問題にあげている。また「日本のことを説明できない、勉強を教えてあげることができない」等、留学生の日本語力の問題もあげられていた。

「国際化」という言葉には、空間的な距離、心理的な距離がなくなっていくこと、外国人との交流の中で、「お互いの価値観の違いを伝え」合う、通じ合うことが国際化であるという意見もあった。国際化に必要なのは、言語などのツール・関心というマインド・交流の場というプレイスの三つをあげている。これは、語学学習、国際理解教育を要望しているし、その場や機会もあればよいというニーズがあることがわかる。当然のことながら、日本、日本文化を教えて、勉強、スポーツ、遊びを共有して交流していきたいが多数であった。

「長岡高専でこんなことができたらいいな・・」という質問には、「週一日、放課後、英語でトーク」、「国際交流の場を設ける」、「毎週、留学生の国と日本のヒットチャートを掲示して、曲を聞けるようにする」、「発展途上国へ留学するプログラムを作って留学する」、「長岡市の市民センターで行っている活動の一部が、高専でもできるように」などがあった。「留学するプログラムをつくる」という要望もあり、留学生の母国であるマレーシアに留学したい学生が多いことが特徴である。また「交流の場をつくる」からは、「英語」を使うチャンスを増やす」という要望があることがわかる。留学生の活躍、自治の機会を提供できずにいた現状がある。留学生の増加にともなって、留学生が高専の既存の組織に積極的に関わる機会を提供する必要があることが読み取れるのでる。日本人学生、留学生の学習の機会の提供、互いを知るための教育、交流の場の提供、留学生と日本人学生が「共存」していくための枠組み作りが必要であろう。

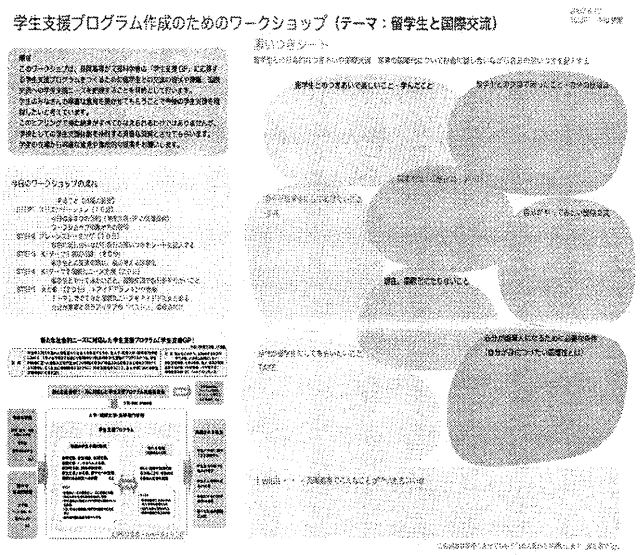


図-1．学生支援プログラム作成のためのワークショップ(テーマ：留学生と国際交流)思いつきシート[2)]

3．長岡市との連携

長岡市は、国際交流事業及び在住外国人支援において、精力的に業務を行っているが、市民と在住外国人からの参加と信頼によって成り立っている。平成19年は、姉妹都市アメリカテキサス州フォートワース市との交流締結から20年となり、記念イベントの実施、記念誌の発行を行った。平成19年11月末現在、長岡から2,338名がフォートワース市を訪れ、フォートワースから1,140名が長岡を訪問した[3)]。この実績により、「姉妹都市交流体験者が主体となり、教育という場を通して、地域にフィードバックしていくシステムが構築され、体験者が一般市民、在住外国人と双方向に交流する人的システム」を涵養してきたことは、長岡市の教育力の賜である[4)]。長岡市の国際理解教育或いは、在住外国人支援について言えば、イベントを活用することに特色がある。市民と在住外国人の交流を通して、参加者はアイデンティティを確立することができる。これは、支援が市民の自立を促したことに他ならない。表－3に今年度の事業を紹介する。

表－3　長岡市国際交流課国際交流関連事業一覧
（長岡市国際文化課資料　2007年）

イベント名	主催者	実施期間 来場者数	内容
①フォートワース市姉妹都市締結20周年記念祭	国際交流協会	4月14日 204名	音楽鑑賞 パネルディスカッション等
②日本・イスラエル・パレスチナ学生会議　ドキュメンタリー上映会～対話から生まれるもの	日本・イスラエル・パレスチナ学生会議	5月19日 14名	日本・イスラエル・パレスチナ学生会議の説明、ビデオ上映
③長岡まつり前夜祭　大民謡流し参加	国際交流センター	8月1日 172名	前夜祭参加・祭練習
④フォートワース市姉妹都市締結20周年記念祭《第二弾》	国際交流協会	8月2日	青少年による文化、スポーツ紹介
⑤日本・イスラエル・パレスチナ学生会議　交流会～近づいてみよう！イスラエル・パレスチナの日常	第5回日本・イスラエル・パレスチナ合同学生会議	8月14日 47名	イスラエル・パレスチナの伝統的な遊びや料理、日常生活の紹介
⑥公開模擬国連	長岡模擬国連	8月14日 7名	パネルディスカッション
⑦ブラジル移動領事館	ブラジル総領事館	8月18日 45名	パスポート更新など
⑧世界の仲間と運動会	国際交流センター	9月9日 81名	運動会
⑨カンボジア大使と語る教育と復興	特定非営利活動法人 米百俵スクールプロジェクト	11月3日 39名	地球安全村 避難訓練 世界の仲間と防災訓練
⑩防災訓練	長岡市民センター	11月3日 39名	
⑪レジ袋の有料化に賛成か反対か？ビデオ上映	長岡模擬国連　長岡技大模擬国連サークル	12月8日	賛成、反対意見についてまとめたビデオ上映
⑫長岡少年少女合唱団クリスマスミニコンサート	長岡少年少女合唱団	12月16日	コンサート
⑬未来市民講座	長岡市民センター「地球広場」 ジカ	前六回	講師による講演、青少年との討論会
⑭世界の仲間と書道展	国際交流センター	1月19日	世界の仲間と書道大会、お正月交流会

姉妹都市フォートワースとの交流事業（①、④）は、財団法人国際交流協会が主催する。国際交流協会とは、長岡市役所国際課と法人、団体、議員等から構成される交流推進員との、委員会の決議をもって業務に当たる。姉妹都市交流事業という市民参画が必須となる事業では、推進委員と行政の連携が重要である。国際交流センターの事業である、③、⑧、⑬は、在住外国人支援を目的とするものである。上記の他の在住外国人支援事業として、「ながおかにほんごひろば」、「外国人による日本語スピーチコンテスト」、「世界が先生－国際人育成事業」が実施された[5]。「世界が先生－国際人育成事業」は県内の留学生を講師として市内の小中学校に派遣し、留学生と生徒が一緒になってお互いの文化を学び、理解し合う新たな国際理解推進事業である。総合的な学習の「国際理解」の内容を深めた、文化紹介をグループで行う。小学校では、国際交流クラブの活動に加わったり、語学練習を行ったりしている[6]。　脇野町小学校、太田小学校、中学校、三島中学校、青葉台中学校に留学生が派遣されている。現在本校の留学生も1名登録しており、さらなる参加、地域貢献が期待されるものである。

②、⑤の日本・イスラエル・パレスチナ合同学生会議は、長岡市の青少年国際理解教育の場であり、学校の枠を超え、世界の諸問題についてのプレゼンテ

ーションを行いながら、学生の資質の向上を目的とするものである。

長岡市の市民センター「地球広場」では、本年度も市民の参画と行政の連携により、国際理解教育、在住外国人支援が精力的に実施されており、これは長岡市の「米百俵の精神」である人材育成が重視されていることに他ならない。

このような、教育力を備えた長岡市と連携することは、長岡高専にとって教育力の向上につながるだけでなく、長岡市にとっても、高専のマンパワーやノウハウを集積する好機となるに違いない。

GP 採択後、初の協議会となったのは、平成 19 年 9 月 12 日　羽賀友信センター長、国際課丸山部長との協議である。議事内容は、

1．市議会で、大学・高専との連携を強化するように要請されたことを受けて、地球ラボを運営するための、長岡市と高専を結ぶ、「地球ラボ連絡協議会」の組織を、実施体制に加えることとする。

2．地球ラボたちあげの、基調講演として、(「国際教養啓発講座」について、初回は羽賀センター長に講演頂くことは承認いただいた。今年度、国際教養啓発講座は、全５回を予定しており、地域からの参加も募りたい。第２回から５回の講師については、羽賀センター長に一任した。丸山氏からは、特に、招聘講師の共有化を進めて、相互に活用できるようにしたいとの提案があった。

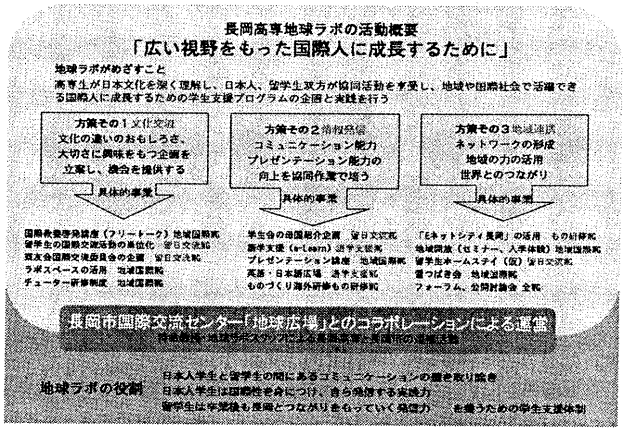
3．高専で現在行われている、国際交流活動を「地球広場」で紹介したい。まずは、雪つばき会の活動記録を、「地球広場」のブラウジングに、掲示したい。

平成 19 年 10 月 4 日、「３大学１高専包括連携協定」が調印された。協定の目的は、芸術分野から経済・産業分野、最先端工学分野までも網羅する市内３大学１高専のとの間で、教育、福祉、産業に至る多様な分野で相互に協力、連携を強化し、長岡地域に集積されたノウハウとマンパワーを活用し専門的な検討を踏まえたまちづくりや人材育成を目的とするものである。答申では、市長・学長懇談会に加えて、実務者レベルの「連携推進協議会」を立ち上げ、実効性・実現性を重視することが最大の特色である[7]。

次は、長岡市と地球ラボ準備検討会議の際の記録である。

平成 19 年 11 月 7 日、第一回地球ラボ準備検討会議の議事内容は以下の通りである。地球ラボ運営方針を決定した。「日本文化を深く理解し、日本人学生と留学生が双方に利益のある」、「国際社会で活躍できる実践力をもった技術者の育成」、「留学生が卒業後もつながりをもつことができる」、「留学生が地域を好きになる」、「留学生間のネットワークの構築」が盛り込まれるよう要請があった。次に、地球ラボの企画である、国際教養啓発講座、日本語・英語広場、プレゼンテーション講座、留学生母国紹介イベントの検討が行われた。

この協議を受けて、作成した長岡高専地球ラボのグランドプランは図－２に示すとおりである。



図－２．長岡高専地球ラボの活動概要

平成 19 年 11 月 19 日、第二回地球ラボ準備検討会議では、長岡市職員の 12 月の勤務日の決定、地球ラボ活動概要の検討、組織図の検討、実施予定表の検討を行った。平成 19 年 12 月 4 日、第三回地球ラボ準備検討会議において、地球広場職員の勤務日と業務内容、フリートークに向けて、準備室会議、学生協議会メンバー公募（一般学生は 10 名程度）を行った。

以上のように、地球ラボは、「高専生が日本文化を深く理解し、日本人、留学生の双方が協同活動を享受し、地域や国際社会で活躍できる国際人に成長す

るための学生支援プログラムの企画と実践」をめざし、「文化交流」、「情報発信」、「地域貢献」の３つを方策とするという骨子が決定に達したのである。

４．他高専、大学の国際交流事業の実情から

東京高専は、国際交流プログラム、オーストラリア、韓国、フィンランドとの学生・教員間の学術・文化交流を実施している。学年・学科を超えた学生間の相互作用、相互学習の体験を重視し、単位化を導入して学習の動機付けを促進している。参加人数や期間を拡大させて、インターンシップに発展させることも目的としている[8)]。

本校同様、留学生の母国訪問を国際交流事業の一環として実施しているのが、舞鶴高専である。マレーシアとベトナムに訪問し、大学、日系企業での交流を行う。帰国後にプレゼンテーションを実施し、交流内容の紹介を行っている[9)]。 熊本電波高専は、国際交流締結校である、シンガポールのポリテクニク３校と交換留学制度を行っている。2007年度の日本人学生派遣は５名で、５ヶ月から10ヶ月、留学生受け入れは、４名で、半年である。教育内容での特徴は、ソフトウェアロボットコンテストと工学教育研究集会である。長期の留学に伴う、単位認定が課題だそうである[10)]。 留学生の母国とは異なる、英語圏、環日本海圏への長期海外留学プログラムを実施しているのは、富山商船である。国際流通学科では、オーストラリア、韓国（延世大学）、中国（大連海事大学）、ロシア（極東大学）に一ヶ月の研修を実施している。また、留学支援室では、１ヶ月、半年、１年の３つの留学プログラムを開設している。当初「異文化体験実習」は当学科の必修科目であったものを改訂し、「英語圏異文化実習」と「環日本海異文化実習」という名称で、選択科目として、１箇所の研修で４単位、２箇所の研修で８単位を認定している[11)]。 本校にとってモデルとなるのは、次の２校である。まず、茨城高専は、「国際交流センター」を開設し、留学生の支援を行っている。当センターは、平成14年に設置、センター長１名、副センター長３名、センター員２名を配置し、留学生支援、学術交流および海外インターンシップ学生支援、海外語学研修学生派遣の業務を行っている。「国際交流クラブ」も設置され、日本人と留学生が定期的に「国際交流クラブ室」に集って、情報交換をしている。この他に、海外語学研修を活用した自主的な自由研究の支援を行っている。認証評価では、「基準２」、「教育組織」において、国際交流センターが留学生と日本人間の相互理解の深化に貢献している点において、「基準７」、「学生支援等」において、国際交流センターが留学生、日本人のコミュニケーションを深め、国際理解力の育成に有効に機能していることが、優秀と認められた[12)]。 現代GP採択校である佐世保高専は、広域展開型の交流事業である、「日中相互交流事業を通した実践的若年技術者育成プログラム」を実施した。日中技術者の相互交流に加えて、佐世保市だけでなく、北部九州全域の活性化を目的としている点において、広域展開型の特色を色濃くだしている。補助事業経費の予定額は、7，400万円と大規模である。毎年、佐世保－中国国際交流フォーラムを、佐世保と廈門市と交互で開催した。[13)]

大学の国際交流センターは、一般的に、留学生の派遣、受け入れ、海外留学支援、日本語学習支援、国際交流活動、地域・社会貢献を業務とする。大学の国際センターは、高専では学生課の業務となる留学生支援と留学派遣業務、そして国際交流活動と語学学習支援の機能を果たしているのである。実際に、長岡高専では、留学生の受け入れや派遣、留学生チューターに関わる業務、海外留学支援は、学生課の業務となっている。他高専の実例、大学の国際交流センターの業務を鑑みると、地球ラボの新たな機能発掘が期待できるのである。

５．今後の課題

長岡市との提携をしながら、地球ラボは、国際交流センターとして機能していくことは間違いない。しかしながら、地球ラボは有機的機能をもつ、活動体である。地球ラボは、ラボスペースにおいても、

ウェブ上において、文化交流、情報発信、地域連携を可能にするコミュニケーションの場である。つまり、長岡高専地球ラボは、「ラボスタッフによるフリートーク」、「プレゼンテーション講座」、「ラボゼミナール」などの活動、人材育成の場であると同時に、ウェブ上で、「地球ラボ電子会議室」を備えた、コミュニケーションの場でもある。これこそが、長岡高専独自の国際交流センターの姿である。今後は、さらなる学生の企画力、プレゼンテーション能力開発に力点をおいた人材育成をめざしていくことが独自性を高めていくものである。長岡市の事業と提携していくことは、さらなる、学外者の参画を促し、開かれた高専につながるものである。

謝辞
長岡市議会資料に関しては、長岡市国際課から資料の協力をいただき、お礼申し上げたい。

参考文献
1）環境都市工学科の佐々木伸子准教授からの資料提供による。
2）佐々木伸子氏の資料による
3）長岡市役所企画部国際文化課：「姉妹都市フォートワース市との交流ついて」『長岡市議会資料』p. 1, 2007.
4）高橋綾子：長岡市と国際交流、「長岡工業高等専門学校研究紀要」43 号　第 1 号、p.43、2007.
5）長岡市役所企画部国際文化課：「在住外国人支援事業について」（国際交流協会）『長岡市議会資料』p. 1, 2007.
6）長岡市役所企画部国際文化課：「世界が先生－国際人育成事業」『長岡市議会資料』p. 1, 2007.
7）長岡市役所企画部企画課：「３大学１高専包括連携協定」『長岡市議会資料』 2007.
8）平成 19 年度教員研究集会（プロジェクト研究集会）竹田恒美：国際交流による動機付け－東京高専の場合、「高専における国際性豊かな人材育成教育の現状と課題」主催　独立行政法人国立高等専門学校機構、pp.59－62、2007.
9）山田耕一郎：国際交流に関する舞鶴高専の取組み－留学生母国への訪問と国際交流に関するアンケート結果、前掲載資料、pp.70－74、2007.
10）松本勤：熊本電波高専の国際交流事例報告、前掲載資料、pp. 75－79、2007.
11）久保槇雄：富山商船における海外留学プログラムの取り組み、前掲載資料、pp.80－83、2007.
12）三好章・奥山慶洋：茨城高専の国際交流センターの活動－海外語学研修派遣プログラムを活用した発展的取組の事例紹介、前掲載資料、pp. 66－69、2007.
13）須田義昭：佐世保高専現代 GP「日中相互交流事業を通した実践的若年技術者育成プログラム」、前掲載書、pp.84－89、2007.

（2008. 1. 21 受付）